執筆を終えて

長い旅になった。目的地も到着時間も設定されていたが、道中、次々と障害が現れ、大幅に日程を超過してしまった。甘く見たのではない。ひとえに私たちの非力のせいである。

編さん委員の委嘱を受けたのは、平成一七（二〇〇五）年一二月だった。行政経験者二人と編集者など二人の計四人。一二年に刊行された『武蔵野市百年史』（以下、「百年史」と略）の場合、全員が大学関係者だったから、この体制自体、今委員会の大きな特徴といっていい。市史編さんの経験者はいない。旅に苦労が伴うのは当然でもあった。

本書は武蔵野市第四代の市長、土屋正忠氏の時代、つまり昭和五八（一九八三）年五月の就任時から任期半ばで辞任した平成一七年八月までの二二年余を対象にしているが、同時に刊行した「年表編」は区切りを考えて、昭和五八年から平成一七年の二三年間とした。追って出る「資料編」と合わせ、三巻から成っている。

旅は、年表作りから始まった。山積する資料の中から一つひとつ事項を拾い出し、一項目一枚のカードに記録する作業に一年以上を費やした。カードは一万枚を超えたが、苦労したのは日付の特定である。不明のもの、資料によって日付の違うものが少なからずあった。カードは、年表編はもちろん、記述編の編集にも大きな力となった。

本書は、表題のとおり、「百年史」の続編である。となれば当然、構成も前著に準拠することになるが、といってそっくり踏襲とはならない。目次の担当者は最後まで組み替え作業に追われた。その間、主に市政の重要課題に携った関係者一〇余人から特別講義を受けた。わざわざ委員会まで足を運んで下さった方々には感謝のことばもない。

市史である。主体は行政か市民か。恐らくどこの自治体史でも一度は交わされるであろう性格を巡って、本委員会

でも何度か激しいやりとりがあった。結局、「百年史」と同様、行政を主体とした記録に落ち着いた。結果論になるが、賢明な選択だった。市民路線は望ましいが、そうなれば人手も時間も数倍を要する。何より記述を補う資料が少ない。とはいえ、可能な範囲で市民目線に立った記述に努めたことを記しておく。その結果、「百年史」に比べて、市議会議事録からの引用が大幅に減った。これも本書の特徴の一つである。

ともあれ、予定より一年遅れの刊行である。執筆に当たったのは編さん委員の四人だが、もとより四人の力だけで出来たものではない。委員会発足と同時に、市の嘱託職員など四人が編集補助として加わった。個人々々の名前は次ページの「担当者一覧」に譲るが、彼らは編さん委員の要求する資料の収集を担当、また原稿の一行々々、数字の一つひとつの点検もしてくれた。担当者欄には載っていないが、後藤圭子、野坂秀子、山田佐保、讃良花絵、梶山知子の五人の女性が期間限定で、主にパソコン入力を担当してくれた。そうしたスタッフだけではなく、無理な注文に何度も応じてくれた市役所職員、取材に特別時間を割いてくれた多くの市民にどれほど助けられたことか。

監修を引き受けてくださったのは「百年史」編さん委員長でもあった佐藤竺・成蹊大学名誉教授である。四人四様の一〇〇〇ページを超える原稿の隅々まで、主に文字遣いなどを丹念に点検してくださった。こうした方々、全ての献身的な協力があって本書は完成した。改めて感謝の意を表したい。

記述には正確を期したが、なお細部に誤りがあるかも知れない。責任は全て編さん委員にある。私たちの役割は、続いて刊行される「資料編」をもって全て終わる。ありがとうございました。

平成二三年一月

武蔵野市百年史続編編さん委員一同

『武蔵野市百年史続編　記述編』担当者一覧

監修　佐藤竺　成蹊大学名誉教授

武蔵野市百年史続編編さん委員会（平成一九年四月～）

委員長　小池牧子
副委員長　長沼石根
委員　木村日出夫
同　舩﨑尚
同　小森岳史（平成二二年四月～）
同　南條和行（～平成二二年三月）

事務局（企画政策室企画調整課歴史資料館開設準備担当）

副参事　福島文昭（平成二二年四月～）
同　鈴木三枝（～平成二二年三月　以後嘱託職員）
再任用職員　稲葉建男（平成二〇年四月～）
同　山本美智子（～平成二〇年三月）
嘱託職員　岡部和夫
同　久保利夫（平成二〇年四月～）
同　岡田明（～平成二〇年三月）

武蔵野市百年史続編　記述編　昭和58年～平成17年

発行日　平成23年３月31日

編　集
発　行　武　　蔵　　野　　市
東京都武蔵野市緑町２丁目２番28号

印　刷　河北印刷株式会社
京都市南区唐橋門脇町28